

## パネルディスカッション登壇者



コーディネーター

やすじま ひろゆき  
安島 博幸 氏  
跡見学園女子大学  
観光コミュニティ学部教授



パネリスト

さいごう まりこ  
西郷 真理子 氏  
都市計画家



パネリスト

いとう さとこ  
伊藤 聡子 氏  
フリーキャスター  
事業創造大学院大学  
客員教授



パネリスト

ほりぐち まさひろ  
堀口 正裕 氏  
雑誌「TURNS」  
プロデューサー



パネリスト

せ た ふみひこ  
瀬田 史彦 氏  
東京大学大学院 工学系研究  
科都市工学専攻 准教授



パネリスト

みね たつろう  
峰 達郎 氏  
全国地域づくり推進  
協議会会長  
(唐津市長)

### パネリスト

#### <地域づくり表彰 受賞団体>

- ・ 特定非営利活動法人日高わのわ会 事務局長 やすおか ちはる 安岡 千春 様
- ・ 鹿部町製品開発研究会 会長 たかはし あきひこ 高橋 昱彦 様
- ・ かまくら応援隊 かまくら祭り運営委員長 すずき せいいち 鈴木 誠一 様
- ・ 特定非営利活動法人ほほえみの郷トイトイ 事務局長 たかた しんいちろう 高田 新一郎 様
- ・ 特定非営利活動法人今庄旅籠塾 事務局長 きたむら やすお 北村 泰生 様

# □パネルディスカッション

## □司会

皆様、お待たせいたしました。只今より、地域づくり表彰の審査会委員と受賞団体によるパネルディスカッションを行います。

パネリストは、今回、受賞された団体より5団体及び地域づくり表彰審査会員より5名です。受賞された団体の方々よりご紹介いたします。

特定非営利活動法人日高わのわ会事務局長の安岡千春様、鹿部町製品開発研究会会長の高橋昱彦様、かまくら応援隊かまくら祭り運営委員長鈴木誠一様、特定非営利活動法人ほほえみの郷トイトイ事務局の高田新一郎様、特定非営利活動法人今庄旅籠塾事務局長の北村泰生様でございます。

続きまして審査会委員の方々をご紹介します。都市計画家、西郷真理子様、フリーキャスター・事業創造大学院大学客員教授、伊藤聡子様、雑誌「TURNS」プロデューサー、堀口正裕様、東京大学大学院工学系研究科准教授、瀬田史彦様、全国地域づくり推進協議会会長、佐賀県唐津市長、峰達郎様でございます。

また、コーディネーターは、地域づくり表彰審査会座長の安島博幸様でございます。

これより、パネルディスカッションの進行は安島座長をお願いいたします。

安島座長よろしくをお願いいたします。

## □安島座長



と思います。

今日は、地域づくり活動の促進につながる活動の実践例や地域の問題解決に向けた方策についてパネルディスカッションを進めてまいりたいと思います。最初に、議事の進め方についてご説明させていただきます。まず、パネルディスカッションにご参加いただいた地域づくり表彰受賞団体の代表の方々から、受賞するにあたって苦労したこと、出てきた課題、その課題を解決するために工夫をしたこと、そして活動が成功した秘訣等について、まずお話をいただきたいと思っております。続きまして、各委員からご意見、ご質問をいただきたいと思っております。その後で、地域づくりの活動の方向性について少しまとめをさせていただきたいと思っております。

本日は、地域づくり活動の促進につながる活動の実践例や地域の問題解決に向けた方策についてパネルディスカッションを進めてまいりたい

それでは、実際に地域づくり活動を行っている団体の方から、活動するにあたって苦労したこと、出てきた課題、その課題を解決するために工夫をしたこと、活動が成功した秘訣等についてお話ししていただきたいと思っております。最初に、特定非営利活動法人日高わのわ会、安岡様にお話をお伺いしたいと思っております。では、よろしくをお願いいたします。

## □安岡氏



わのわ会の安岡と申します。本日はありがとうございました。わのわ会のある日高村は人口5,000人を切っております。わのわ会が始まって15年になりますが、その頃には6,300人の人口がおりました。年間100人の人口減が進んでいる村です。その村の中で何をしてきたかという、困り事を

解決するコミュニティビジネスの開発と展開を行ってきました。多岐にわたっておりまして、活動している内容を4分というのはなかなか難しいところがありますので、またホームページ等見ていただければと思いますが、23事業ぐらいを行っております。

困ったこととか、というお話だったのですが、やってきて何か困ったこととか課題とかということはありません。すみません。活動は、地域に困ったことがあるから何か解決しようということで始めておりまして、地域活性化とかいう明確な目的があって活動を始めたわけではなくて、困ったことを解決しようということでお母ちゃん達が立ち上がったというところがあります。なので、困ったことがあると、それが全てビジネスになっていくというふうな形でしたので、自分達の困ったことというのはあまりなくやってきました。

ここで皆さんにどうやって達成できたと言われる部分も、まだまだ、これから先進むものであって、展開していくものであるもので、今回受賞させていただいて達成感はずごくあるのですが、まだまだ事業自体は達成していないと思っております。これから先、長く発展していくとか、そういう風に色々形を変えながら発展していくものになっていくのだろうなと思っております。ですので、どう困ったことを言えば良いのか、できる人ができる力でできることをやってきたらこの活動になったというところが、私達の特徴であります。またホームページなり、今日お配りした冊子なりを見ていただければ良いなと思っております。

#### □安島座長

うまく活動が続いて、成果を上げられた秘訣は何だったと思えますか。

#### □安岡氏

やっぱり人ですかね。お母ちゃん達の輪、「わのわ」というのは、人の輪、話の

輪、平和の輪が続いて大きな輪になるということを目指に「わのわ会」という名前をつけたので、お母ちゃん達の輪がうまく回っている点と、細やかな心遣いと気づき、お互いの連携ですかね、報・連・相がうまくいって、揉めることもなく、みんなまで今までやってこられたのが、この成果につながっていると思います。ありがとうございます。

#### □安島座長

ありがとうございました。

それでは、続きまして鹿部町製品開発研究会の高橋様にお話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いたします。

#### □高橋氏



私から一言申し上げます。私は、北海道の鹿部町から参りました、製品開発研究会の高橋昱彦と申します。

私どもの研究会の最大のモットーであります特産品による地域おこし、これが我々の最大のテーマでございます。今回は、その中で苦労の話と課題について、若干ですが、この2点ほどに絞ってお話しさせていただきます。

1点目は、これは他町村でもあると思うのですが、地域づくりは誰かがやるものだという他力本願的な考え方です。2点目は、軽石干しを今回出したのですが、残念ながら漁業者や加工業者になかなか理解、賛同が得られなかった。これがちょっと残念ですが、そのようなことがありました。これは苦労の方の話です。1点目の、地元の人の意識ですが、人口4,000人を切る高齢化、漁獲量の減少、それから雇用の場も減少している中で、何回も言いますが、町民からの危機感がちょっと薄いような気がします。これはやっぱり今までの漁業補償とか助成金・補助金頼みの生活をしてきたというところが大きな原因だという気が私はしていますが、

そんな中で、我々土木・建築自営業者等で異業種の交流メンバーとリゾートに転入者がたくさんおりますが、その人達とで、補助金に頼らない、地元素材を活用した継続的な製品開発、こういうことができないだろうかということで始めました。最初は、小さい町ですが、物好きが大したことではできないだろうという冷ややかな反応でございましたが、活動する中で意外な地域力が見えてきたことは最後に申し上げたいと思います。

2点目につきましては、漁業者、加工業者の反応です。まず、漁業者につきましては、魚は鮮度が良いものを出荷するのが一番良い、これは当たり前の話なのですが、これはその人達にとっては当たり前ののですが、我々が考えたのは、付加価値をつけて、これからの時代にもう少し幅を広げたらどうだ、こういうお話をするのですが、本当に取りつく島もない状態でした。さらに、加工業者ですが、加工業者に軽石干しの製造依頼をしましたが、見込みも立たないものにコストはかけられないという、こんなお話でございました。ところが、そんな中で1社大変協力をしていただけたところがありまして、今でもそのまま続いております。軽石製造から約5年経ちましたが、おかげさまで、ふるさと納税の返礼品、百貨店販売、通販、テレビショッピング等で販売を確実に伸ばしている状況でございます。

活動の成功の秘訣まではいかないと思うのですが、一応秘訣ですが、やはり人と人との交わり、また結びつき、これが最大のエネルギーになったのだと私は確信しております。確かに当町は、人口は減少しておりますが、地域には多彩な人がおまして、魚に詳しい人はもちろん、加工、料理、宣伝、デザイン、意外な経験や経歴の持ち主達が私達に惜しげもなくアドバイス、またアイデアを提供していただきまして、会を非常に盛り上げていただいているところでございます。

現在の研究会は、会員は6名ですが、有形無形のアドバイザーが20名ほどおり

ます。もちろんもつといるのですが、一応20名ほどおります。私はその仲介役、こんなことができれば地域の力を出せるのではないだろうかという風に考えております。これから、私達が考えております特産品による地域づくりに貢献できればありがたいなと思っております。

本日はありがとうございました。

#### □安島座長

どうもありがとうございました。

色々な多彩な方々が開発に携わっていただけるようですが、ご説明の中で「リゾートの方々」というのがあったのですが、その辺少し説明を。

#### □高橋氏

リゾートって、これは大和ハウス工業が大規模に開発して、昭和49年ですからもう約45年以上経ちますか、そこに約70万坪、243万平方メートルという大きなリゾート地をつくりまして、ゴルフ場とかホテル等もあります。そこに今、定住者で500人ちょっといるのですが、夏は鹿部で、冬は東京、大阪、もつと温かいところから来ている人もいます。そのころになりますと、人口が4,000人弱の町ですが、700人、800人という方が今いる状態です。今はもう半分ぐらいに減っちゃったかな。今の時期になりますと帰ってしまいますのでね。そんな状況ですが、その人達と町の町民との交流、これは今の会とかじゃなくてスポーツ、卓球でも、フラダンスであろうが、男の料理だとか、そんなことで色々なところで町の人、それから漁民とも、漁業の方に、鹿部町はホタテの養殖が盛んなのですが、そういうところにお手伝いに行っているという方もたくさんいらっしゃいますので、そういう方が地元の人との交流を深めながら、まちづくりというか、町をこれからどうしたらいいだろうか、このような話をしながらやっているところは見受けております。

## □安島座長

よくわかりました。どうもありがとうございます。

それでは、続きまして、かまくら応援隊の鈴木様にお話をお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

## □鈴木氏



よろしく願いします。かまくら応援隊の鈴木といいます。

今朝、当地域の黒岩山の山頂付近800mぐらいのところは雪で白くなりました。

今年は台風第19号災害により飯山市は被災しました。市役所も内水により、1m50cmぐらいまで水位が上がり、私が思ったよりもとても大変な状況になってしまいました。かまくら応援隊もボランティアとして、2日間ほど2トンドンプ2台で1軒のお宅の被災ゴミの撤去を手伝い、市からも感謝されました。分別するのがすごく大変なのです。もう何でも良いから積み、降ろす時に分別していくという方法をとりました。

もう一つの大きな出来事ですが、飯山には飯山高校がごございます。この高校はスキーの名門で、スキー部は総合優勝を何回もしていますが、今年は野球部が活躍しました。なんと甲子園に行きました。これは画期的なことで、雪国から甲子園に行ったと、すごく話題になりました。この地域は奥信濃といいまして、昔、昭和24年に飯山線森宮野原駅で積雪7mになり、電線を超えて渡ったという歴史がごございます。その中に生きているという、「克雪飯山」という課題が昔からありました。話がそれてしまいましたが、かまくら応援隊が作成したかまくらを舞台にしたかまくら祭りは、とにかく安全に行ってもらいたいと思いながらかまくらをつくっております。今まで事故は1回ありました。活動の担い手は、平均年齢70歳以上ということで私も改めて認識しまし

たが、私も10年前は60歳でした。

活動してきたことで苦労したことは、かまくらは、バルーンを使うという特殊なつくり方をするのですが、きっかけは、私がチューブを3本重ねてブルーシートをかけて、チューブをとったら犬小屋ができた、それが最初でございます。それから、近所に生地メーカーがあったことから、特殊な合成ゴムでつくるバルーンを開発し、かまくらをつくりました。当時はスキー場の会社でバルーンをつくったのですが、スキー場がお客さんの低迷で2年後に閉鎖しました。民宿も減り、かまくらを提供していた観光協会も解散し、その後、かまくらに関しては一般社団法人信州いやま観光局が継承し受け付けが始まりました。市も、飯山はかまくらをPRするんだということで、2016年、国のふるさと創生事業、4,600万円をお認めいただいて、市にはその内、50%を助成していただきました。それまでは、リンゴの箱をひっくり返して腰かけにしたりテーブルにしていたのですが、気のきいた机や腰かけになったり、仮設トイレが本設のトイレになりました。仮設トイレでは着込んできた上着を脱ぐことができなかつたので、すごく助かりました。雪上車、スノーモービル等、シーズンのイベントに使っております。

また、飯山市はそのバルーン、金額が高いものでございますが、3基を新調していただいたりしております。うちの隊長、平井勝美が応援隊をつくろうということで、当初は10人ぐらいで、今では25人ほどのメンバー登録がごございます。人数が増えてスムーズに、「今日は何個つくるんだ」とか、そういうことができるようになりました。雪の日もメンテナンスをして、お客さんを受け入れております。メンバーは皆さん仲よく、それぞれの持ち味を生かして、交通部長とか灯明部長とか広報部長といった役割を担っており、ちょくちょく慰労会を行います。意見交換をして、「こんなことをしていこう」ということをよくやっております。皆さん平

均70歳なのですが、グリーン期は地元の農業生産に従事し、重機を動かす人、大工さん、電気屋さんといった技術者を有し、年寄りのたくましさを感じるところであります。一杯やりながら、良い案や担当者が決まっていきます。今回、かまくら祭り20回記念シンポジウムを行いたいと思っております。あと40日ほどでかまくらづくりが始まります。

ありがとうございました。

#### □安島座長

どうもありがとうございました。

今は、スキー場はもうやっていないのですね。スキー場がなくなったかわりにこの活動をされているということですね。

#### □鈴木氏

そうですね。スキー場自体は地元の資本だけで、外資は入っておりませんでした。インターハイも2回やっている、なかなか有名なスキー場だったのですが、スキー人口が減ったことには勝てませんでした。

#### □安島座長

お話の中に出てまいりましたが、信州いいやま観光局というのは、DMO（観光地域づくり法人：Destination Management Organization）の成功例としてよく取り上げられておりますが、色々なステークホルダーの方が参加してうまくいっている例の1つなのかなと私は思っております。ありがとうございました。

それでは次に、特定非営利活動法人ほほえみの郷トイトイの高田様にお話を伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

#### □高田氏

私達の取組は、山口市阿東という山口県の北東部の山間地域で行っています。平成22年2月に、地域内に唯一あったスーパーが撤退したということのをきっかけに始まりました。買い物の課題という



のが顕在化したことで、買い物ということだけではなく、これから人口が減って子供が減っていく中で課題が増えていくだろうと、地域の中に不安が一気に広まっていったということが、事の始まりです。

地域の人達と一緒に、その不安をどうすれば将来の安心に変えられるのかということで話をしっかりしまして、最初に一番苦労してやったのは、地域の皆さんの意識を変えるということです。どうしても課題が増えて、社会環境が悪くなっていくと、どうせ自分達の地域はだめなのではないか、将来子供達が帰ってこないのではないかという風に諦めてしまうのが地域にとって一番マイナスだなと感じています。それを、何とかそのモチベーションを、自分達のふるさとの未来を自分達で責任を持ちましょうという風に投げかけをして、地域の中を皆さんに呼びかけをして歩きました。結果として、平成24年4月に地域の中に地域拠点「ほほえみの郷トイトイ」ということで、地域の寄りどころをつくらうという取組の中でスタートします。そして、地域の将来像を明確化するというを地域の皆さんとしてきました。コミュニティが壊れかけてしまったがために皆さんの中に不安が広まったので、キャッチフレーズを「地域の絆でつくる、笑顔あふれる安心の故郷づくり」というふうにみんなで共有して取組を始めます。

最初はミニスーパーと交流スペースの小さな拠点から始まりましたが、今では、そこから移動販売車を走らせたり、介護予防の取組をしたり、地域食堂をしたりということで、年々地域の中から皆さんの声を1つずつ丁寧に拾って、どういう課題が潜在的にあるのかというのをしっかりと聞き込んでいき、一つ一つ解決手法として、1つやり方としてはビジネスとしてしたり、事業としてしたり、ボラン

ティアの活動としてしたりということを組み合わせています。まだまだ途中の取組なので、本日は表彰いただいて非常にありがたいと思います。私達「ほほえみの郷トイトイ」という団体が受賞させていただいたというよりは、私達がやってきたのは、地域の皆さんが、子供から高齢者まで一人一人がその地域で輝いて、いつまでもそこで幸せに暮らし続けたいという願いを叶えられるようなプラットフォームをつくってきたことです。ですので、今回の受賞にあたっては、地域の皆さん一人一人の頑張りを認めていただいたのだなという風に、持って帰ってまた皆さんと一緒にこれからの取組をしていきたいと思っています。

うまくいった秘訣というのは特にはないのですが、常に時代が変わればニーズは変わってくるなと思っています。特に私達は、地域の拠点と、そこから毎日地域の中を走る移動販売車を使って、常に地域の中の状況をマーケティングしながら、何をしていくかということをしつづつためていって洗い出して、みんなで知恵を絞って次にやるべきことをやってきました。なので、これからも何をやるかというのは、多分今私達の頭の中にあることと、地域の中で今から起こってくることをしっかりとすり合わせていきながら、その時代に変化していきながら地域の中に、人口はずっと減っていくとは思いますが、とにかく笑顔があふれていくような、そういう取組を目指して活動しています。

本日はありがとうございました。

#### □安島座長

ありがとうございます。

高齢者の買い物の問題を解決するところから始まって、全国でこの活動はモデルになるのかと思います。買い物以外にも色々なところに活動が広がって、色々な展開を見せておりますが、「トイトイ」ってどういう意味でしたか。

#### □高田氏

地福という地域に伝わる「地福のトイトイ」という伝統行事がありまして、年末年始に子供達が、その年にとれたもち米の藁を使ってこのぐらいの馬をつくります。その馬を旧正月の1月14日の夜に地域内の各家庭に持って行って、「トイトイ」と子供達が声をかけて隠れるのですが、そうしたら玄関先を開けてお菓子とかおやつと交換してくれるという伝統行事が昔から形をあまり変えずに地福というところでは守られてきたということで、ちょうどこの拠点ができる直前に、それこそ国の方で重要無形民俗文化財に指定していただきました。地域の皆さんに拠点の名前を公募したところ、ぜひ「トイトイ」というのを使ってほしいということで、そのようなネーミングになりました。

#### □安島座長

子供達が回ってお菓子をもらうのですか。ハロウィンのような。ありがとうございます。

それでは続きまして、最後の発表になると思いますが、特定非営利活動法人今庄旅籠塾の北村様をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### □北村氏



よろしくお願いいたします。今日は、こんな立派なところへ呼んでいただきまして、また、表彰していただき、本当にありがとうございます。

私達は今庄旅籠塾といって、旅籠（はたご）という名前のとおり、住んでいる地域は京から越国（こしのくに）の方へ抜ける、その峠の宿場町であった今庄宿（いまじょうじゅく）というところに拠点を置いております。メンバーは初め5人で始めたわけですが、今は20人になっております。色々な職業、性格、人間性、能力を持っておりまして、お互いの異なった力

を尊重しながら自分の課題を探し出せるように工夫しております。

活動の発端になったことは、今庄地区で困ったことです。その困ったことというのは、全国にも共通することだと思っておりますが、人口が少なくなって、空き家が増えて、だんだん町が寂れて、懐かしい今庄宿の風景が崩れていくということなのです。困ったと思う人はたくさんいるのですが、なかなか行動に移せないということで、私達が、とにかく建物を残そうということで持ち主にお願いして、許可をいただいて改修工事を始めたわけです。ところが、さらに困ったことがあります。気持ちが十分あるのですが、資金がありません。メンバーは色々な力を持っていますが、金を持っている人は金を出せと、力がある人は力を出せと、汗かいて、そして、金も汗も出せない者は知恵を出せと。どれか1つ出せば何とかなるだろうということで、とにかく行動を起こしました。そして、古い江戸時代につくられた旅籠であった「若狭屋（わかさや）」というところですが、壊される寸前の建物を、改修工事をして何とか復活させました。100年以上たって今庄宿に若狭屋が蘇ったということなのですが、またまた困ったことがたくさんありまして、私達はどちらかという後期高齢者も含めて高齢者が多いので、力がないと。そういうところに、メンバーの中に工業高校の教員がおりまして、自分達が専門にやっている建築の技術を実際に机の上、教科書の中でなくて社会の中で学ぼうという計画で、「町家改修と宿泊体験」ということを始めました。大学の先生方も大学生も参加されて、それから今年で10年、何とか続いてきているわけです。

それによって、良かったこととして、当然私達は異年齢の集団で世代を渡っていますから、若い子は16歳ぐらい、年齢が上の方は70、80近い人ですが、年齢・世代を超えて交流できたことと、若い世代がまた何年か経って戻ってきて指導してくれるということ、技術がマニュアル

でなくて人から人へ、手から手へ伝わったということで、建築の技術も、それから色々な他の技術も伝わっていったという良いことがあります。

その他にもっと良いこともあるのですが、最初に手がけた「若狭屋」というのは旅籠でしたから、その旅籠の文書関係も出てきまして、その文書に則った旅籠の改修方法を学生とともに考えて、物語をきちっと持った、あるべき姿の旅籠ということで、改修結果は、多目的な文化施設として、そこでイベントをやったり会議をやったりという使い方をしています。

2つ目に手がけた一般住宅の「山田家」というのは、その中へ入ると親の家へ行ったような、あるいは年寄りの家へ戻ったような、そういう雰囲気の家ですから、ほっとできるようなカフェ「木ノ芽」という名前のカフェに直しました。

そして3つ目を手がけたのですが、「大黒屋」といいます。この大黒屋も文書を調べると、昔、明治天皇が北陸行幸の時に大隈重信が泊まったという記録が残っていますし、泉鏡花の「夜叉ヶ池」、あるいは山本周五郎が執筆したという話もあるので、こういうストーリーと、それからこの大黒屋が持っている旅館であった時代と、今庄は鉄道の時代もありましたから、鉄道の時代には弁当屋としてこの大黒屋が繁栄したということも含めて、地域のマーケットとして改修をしました。それによって、もう最近は買い物難民と言われるくらい商店がなくなっておりましたので、独居者あるいは高齢者のための色々な良い施設として生きています。

私達はこのようにして地域の資源を磨くという活動も同時に行い、そしてそれがさらに広がりを見せまして、行政にも注目していただいて、ありがたいことに「今庄プロジェクト事業」というプロジェクトで予算をつけていただいて、私達の活動に対して補助をしていただき、非常に良い関係に進んでおります。

また、地域で昔頑張っていた商売人さんも、それならばと少しずつイベントを

やったりして頑張ってきていただいていますし、そういう町並みを売りに、観光バスも最近増えてきました。私達に無料で案内をしろ、という風な無理を言うようになってきたのですが、それも地域の活性化として良いことだと思いますし、コンサートをやりますと地域のお年寄りがきれいな洋服に着がえてコンサートに行くという、いまだかつてなかったような、そういうおしゃれな場所にもなってきました。「地域おこし協力隊」というのがどこの県でもおられると思うのですが、その若者も私達とともに動き出していただいて、私達は、他の団体の方のように商品開発とか、あるいは経済的な見込みとか、売り上げが何倍とかというようなことがありませんが、これから私達の色々な活動をベースに、それを利用してまちづくり、地域づくりが完成に向かうように使っていただければ私達の活動が意味を成すのかなという風に仲間同士慰め合っております。

#### □安島座長

ありがとうございました。

非常に若い、高校生も参加しているとお聞きしました。高校生は何人ぐらい参加して、どんな活動をされるのですか。

#### □北村氏

毎年、少ない時で30人、多い時で40～50人、大学生も入れるともっと参加しまして、男の子が多いので、この町屋に1泊、そのまま夏場ですからタオル1枚で寝て、そして私どもがご飯をつくってあげるという活動を。

#### □安島座長

利用者として参加するのですか。

#### □北村氏

お客様でなくて、我々と同じ同業者として考えてください、同じ立場で仕事をしてくださいと、そういう風に高校生に伝えております。

#### □安島座長

なるほど。ありがとうございました。

5つの団体の方から色々お話を伺いました。それでは、これからは、審査員を務めていただいた委員の皆様から色々質問やご意見をお伺いしていきたいと思いません。

それでは、西郷さんから順番でよろしいですか。

#### □西郷委員



どうも皆さん、こんにちは。私、まちづくりの専門家で西郷と申します。よろしくお願ひします。

この審査委員会で長く皆さんの活動を見ているのですが、本当にレベルが高くなってきているというのをとても感じます。そういう意味では、プロの人達が入っていないのにプロ以上の活動をされている、レベルがどんどん高くなっているということで、要するに地域にある「本物」をちゃんと地域の人達が見つけて、それを本物にしていくことによって成功していくというのを感じています。ということは、本物を見つけられるというのは、地域の人達のライフスタイル自体が変わってきていて、本物を大切にするライフスタイルになってきている。言ってみれば、生活文化を大切にする社会ができ上がってきている。日本は江戸時代から、自分達の生活の文化の質がものすごく高いという風に、世界的に見てもレベルが高いという風にいわれていたわけですが、ここに来て改めて地域の生活文化のレベルが高くなってライフスタイルそのものが非常に本物になってきている。食べるものとか行動とか、そういうものですね。それが本物になってきていて、本物になってきたものを、皆さんが課題解決とおっしゃっていますが、本物がもう見えてきているのでね。それを考えると、成功していくというのが、まさに今日の皆様のご発

言を聞いて感じていました。

私は専門がまちづくり、町並みなので、最後にご発言なさっていた今庄旅籠塾の方にちょっとお聞きしたいのですが、町並み保存というのは言われて長いのですが、簡単なようでいてなかなか難しいところがある中で、まさに比較的私は短期間にもかかわらず、かなりプロがやるべきようなことをきちんとやられてきた、本物がちゃんとできたということがすごいと思うのですが、それはプロが集まったのですか。要するに、なぜこれだけ本物のものができましたかというのが質問です。今ご発言なさっていた中ですね。それから、たくさんの方が参加されているので、町並み保存というのはどうしても一部の人達という風になってしまう傾向がある中で、これだけたくさんの方が集まったものができたのかなというのが、2点ご質問なのですが。

#### □北村氏

的確な答えができないとは思いますが、短期間でプロの仕事がなぜできたかというのは、プロのレベルがちょっとわかりませんが、私達は幸いにも大工、設計事務所、そして学校の教員、それからデザイナーなり、食品をつくる食品加工の方、多彩な人が寄り集まったというところですよ。

#### □西郷委員

たまたまですか。

#### □北村氏

たまたまですね。理事長の高嶋は何でもやりたい人間なので、誰でも引っ張り込むという強引さがあるということですね。強引さがあるのですが、引っ張り込まれる人間は強引だと思わないところが良いですね。本当です。左官屋の方も教えるようなことをやっておられる方ですし、そういうことが、お金はないが、お金以外のことなら任せておけという。それで、お金の方は行政の方が何とかするよとおっしゃってくださったところが幸運なところ

ろかなと思います。

それから、2つ目の、なぜ多くの方が参加。これも理事長の高嶋がにぎやかなのが好きだということですね。それから、理事長は腕力がないので若い人にやって欲しいなと言うと、若い人はやってあげようかなという気持ちになる。他の団体の方も言うておられましたが、やっぱり人の関係がベースだと思います。

#### □安島座長

ありがとうございました。

それでは、伊藤委員、お願いします。

#### □伊藤委員



皆さん、こんにちは。このたび審査を務めさせていただきました伊藤聡子と申します。

私はメディアでの活動でもしかしたら皆さんもご存じの方が多いかと思うのですが、実は事業創造大学院大学というところで客員教授も務めさせていただいております。それは何かというと、地域それぞれの魅力をいかに発掘して、それを雇用につなげて、そして地域の元気をつくり出していくか、こういうことを目的に起業に特化している大学院大学で、私自身は全国の地域、それから中小企業の取組を取材させていただいて、どういう視点でこれから活性化につなげていくのか、元気につなげていくのかというテーマで活動しているのですが、今回受賞された、たくさん事例を通して、やはり皆さん、困ったことをどう解決していくのが起点になっていると思いました。特に、これから地方というのは課題先進地域で、本当に困ったことがたくさん起きてきます。でも、それらを逆にピンチをチャンスに変えている、地域にとって困っているな、厄介ものだなと思われているところに実はビジネスチャンスがあって、それを集客につなげているというところ

が、非常にたくましいと思いましたし、全国に広げておきたい事例がたくさんあるなどという気がして、楽しみながら審査をさせていただいた次第です。

特に、今回国土交通大臣賞を受賞されました日高わのわ会。これは今でいう、いわゆるシェアリングビジネス。本当に人手不足になって労働力が足りなくなる中で、十分なサービスを提供できないとか活性化につなげられないという地域が全国でも増えている中で、とにかく地域にいるお母さん達が空いている時間でやることをやったら良いじゃないかと。それによって困っている人を助けたら良いじゃないかと。本当に単純でありながら非常に純粋で、しかもその視点が一番大事なんだよな、というところをうまくビジネスにつなげているというところが非常に感心しましたし、これは全国に広がって行ってほしい取組だなと思いました。

女性の目線というのは、やはり人に寄り添う力があるということ。それから、例えば廃棄されるべきトマト、男性の目線だったら商品にならないから捨てちゃおうという発想になるところを、それ捨てるのはもったいないよねという女性らしい、主婦らしい感覚で加工食品につなげていくなど、そういう女性の良さをふんだんに活かしているなどというところも感心しました。

お聞きしたいところは、本当に、23事業と多岐にわたっているのですが、その中で収益の柱になる事業というのはどういう事業なのかということと、それから女性が空いた時間で何かやれることをとると、大体子育てをしている人が中心だと、子供が学校でいない時間にやれることとなると限られて、集中するんじゃないかなと思うんですね。その中でどうやって事業を振り分けていかれたのかということですね。そのあたりをお聞きしていきたいなど。あと、全国に広げていくにあたって、ここがコツだよというところがあれば教えていただきたいという風に思います。

#### □安岡氏

ありがとうございます。主なる柱というのは、加工と言いたいところなのですが、喫茶を2店舗やっております、喫茶の収益が一番大きいです。その次が加工、その次が福祉事業。で、収益につながらないけどお母ちゃん達には必要な託児のある児童福祉部もありまして、地域の子供は地域で育てるみたいな事業もやっております。受託事業は全体のほんの5分の1ぐらいの収益のような形でやっております。

子育て中だからどうやって時間をやりくりしたか、というところですが、始めた頃は13年前ですので、今関わっている、お母ちゃんの子供達はみんな保育園に行っていました。なので、保育園に行っている間だけ働くという風な仕組みになっていまして、朝早くにごみを出すとか、配食のお弁当を夕方回収して洗うとか、そういう部分については高校生がバイトに来たりとか、引きこもっている子供がアルバイトに来たりとか、足りない部分はできる人を足すという風なやり方をしてきたので、回ってきました。今は、お母ちゃん達の子供達はみんな高校生や、大学生になり、子育てが一段落して時間もでき要るし、お金も必要で、そんな働ける時間が長くなったお母ちゃん達から順番に常勤雇用になりましたので、全員で14名の常勤雇用があります。その他にパートが20名ぐらい、障害者17名ぐらいが一緒になって仕事をつないでいます。障害があろうがなかろうが、みんな同じ人間なので、できる時間にできることをやれば、助け合えば1日の仕事が回る、という風な感じで運営しております。

#### □伊藤委員

全国に広げていくにあたっての何か秘訣はありますか。

#### □安岡氏

全国に広げていくにあたっての秘訣ですか。みんな同じ人間ですので、そこを大

事にしながら、空いている時間をどう使うかというところのマネジメントができる人がそこに1人いると、その人から順番に広がっていくのではないかなと思います。人を人がつないでいくみたいな感じで、熱い思いのあるお母ちゃんにマネジメント力がつくとすごく良いのではないかなという風には思います。まず1回見に来てください。

#### □伊藤委員

ありがとうございました。

#### □安島座長

ありがとうございました。

それでは続きまして、堀口委員からお願いします。

#### □堀口委員



皆さん、こんにちは。「TURNS」の堀口と申します。

2011年の東日本大震災があり、その翌年に「TURNS」というメディアを創刊したのですが、実は、この「TURNS」発刊前にも「自休自足」という、まさに地域とつながるメディアを発行しておりまして、更にその前身、まだ我々が出版社としての事業を始める前にも地域メディアをつくりたいということで、ある出版社と協業して「夢田舎」という地域メディアの製作に関わっておりまして、実に30年近くに渡り地域メディアを発刊してきた会社なのですね。地方創生の地の字も言われる前から実は地域の現実取材して各地を応援する取組をずっとやっております。色々な危機感を持たれた自治体さんと一緒になって、地域課題の解決に繋がるような様々な取組をやらせていただいている中で感じるのは、今回受賞された団体さんもそうですが、次の代に“繋いでいく”ということを重要視されている地域が増えているということです。

実は、今回のこの地域づくり表彰のご縁で、「わのわ会」さんを取材させていただきました。6ページに渡り、わのわ会さんの取組、活動内容について取材させていただきました。そこにまた、今回の発表では知りえない事例とか裏話なんかも出てくるのでご参照ください。

それと、各事例の内容には全て非常に興味があるのですが、1つだけ質問したいのは、今、繋ぐというお話をさせていただきましたが、「かまくら応援隊」のことで、平均年齢が上がっているというお話がありました。ここに来られる来場者の方がどんどん増えてきたりして、かなり注目を集めていると思うのですが、若い人達に関わってもらえるような仕組み作りは少しずつ考えられてるのでしょうか？

#### □鈴木氏

正直、特に考えておりません。応援隊の多くは、グリーン期は田んぼのお手伝いして、皆さん、引退なさった方が多いです。現役でおられるのは3～4人おられますが、皆さん、仲間が良いという。10年前平均で皆さん10歳若かったのですが、だんだん年をとってきました。あまりうまくできない人はお呼びしませんので、気の合う人だけでやっています。それが一番生きがいですかね。

#### □堀口委員

ありがとうございます。私達が地域メディアをつくり始めた時はまだ私も20代、もう今50手前ですが、当時自分はまだ若いと思ってやっていた人達がどんどん年代が上がっていつてますが、その人たちがこれまで培ってきたノウハウや知見に若い人達が触れて、そこに惚れて地域に入ってくるケースというのが全国でどんどん増えています。だから、活動自体のみならず、そこに取り組む人達の生き様みたいなものに惚れて人が動いているという多くの事例を見てきているので、そういう場作りでも、ご縁ですから何か

お手伝いさせていただければ幸いです。

何か宣伝ばかり言っているような話になってしまいましたが、ありがとうございました。

#### □安島座長

ありがとうございました。

それでは、瀬田委員、お願いします。

#### □瀬田委員



東大の瀬田と申します。

私は国土計画ですとか都市政策の研究をしています。特に地域の連携のまちづくりみたいなものを研究したりしていますので、今日ご受賞された様々な、非常に先進的な活動という

のが、どのような形で他の地域に広まっていくかとか、あるいは他の地域と協力してお互い高め合っていく、そのためにはどんな制度とかシステムとか、そういったものがあれば良いかといったことも研究の対象になっています。

こういったことを研究していて、国土交通省の色々な審議会・委員会に、昨日もそうですし、先週も2回ぐらいありましたが、呼んでいただいてご意見をさせていただく機会が多いのですが、テーマが全体としてやはり深刻ですね。今日のアトキンソンさんの講演もそうでしたが、人口減少ですとか、あるいは経済の縮小、生産性の低下。あるいは、より都市的なテーマになると、空き地・空き家ですとか限界集落。あるいは都市にも最近限界団地というのがどんどん増えています。それから、耕作放棄地、森林放棄地あるいは買い物難民とかですね。それに加えて、ここ数年というのは災害が非常に多い。地震、津波、それから今年は特に台風の被害が結構多かったのではないかと思いますね。そういったことに当然しっかり対応しなければいけない。そのためには、国としてどんな政策をするべきかですとか、ある

いはそれぞれの地域の各主体にどういったことをやっていただくのが良いかということも当然考えるのですが、どうしても少し暗い話になりがちなのですよ。

そんな中で、今日ここに立たせていただいて色々な事例をご紹介いただくと、少し明るくなってくる。それは、こういった活動自体をお聞きするだけでも非常に明るくなりますが、先ほど休憩時間中に皆さんで写真撮影をされていた。その時に本当に皆さん同士仲良くやられていたというのが非常に印象に残っていて、実際の現場というのは結構深刻な部分もあるのかなと思います。それにもかかわらず本当に、恐らく明るく皆さんで協力してやられているというところが非常に印象にも残りましたし、そういったことが今後も非常に大事なのかなと思いました。

私から1つご質問させていただきたいのは、「ほほえみの郷トイトイ」の活動です。やはり地域も常に同じではなくて、どんどん変化していくと。それに従ってニーズも変わっていくんだよ、ということをお話しされていました。その変わっていくニーズに対して、どんな形でそれをくみ取ってマーケティングにしたり、あるいはボランティアの活動の対象にしたりするということだと思うのですが、私も色々な地域活動を見ていて、言うは易しなのですが、なかなかうまくくみ取って、特にマーケティングとしてビジネスとしてやっていくというのは非常に大変なことなのではないかなと思います。その辺どういう形で新たなニーズ、あるいは変化するニーズをくみ取っていくのかという、その秘訣についてお話しいただければと思っています。

#### □高田氏

秘訣というほどではないですが、とにかく地域の声をしっかり聞くということです。最初に私達も痛感したのが、この拠点を始めて、地域を歩いて「困っていることはないですか」という風にお年寄り

に聞いて歩いたのですが、ほとんどの方が「特にな」と。私はこうやって生きてきたからみたい。でも、見たら明らかに一人暮らしのおばあちゃんのごみを出すのも困っているわけですよ。ということは、「困っていることはないですか」と聞いてちゃだめなのだなということ。僕達は気づいて、信頼関係をまずつくっていき、日常の会話の中で本当にお年寄りが一言一言、自分の生活のありよう、本当に困っていることを、家族にも相談できないようなことを相談してもらえよう。そういう信頼関係を、私達のところのスタッフとつくっていくしかない。それを移動販売車のスタッフも含めてとにかくうちのスタッフは傾聴ということをし、しっかり頭に入れて研修もしながら、その声なき声を地域から拾い集めるということ。特にここ数年は力を入れてやっています。その中で出てきたものに対して、1つの事業としてはマーケットが小さいので成り立たないので、複数組み合わせで1人を雇用することができるのではないかと、いう風に掛け合わせていって、少しずつ収益を得るように持っていって、それを常に走りながら少しずつ変化させていって、今ここまでやっている途中です。

#### □瀬田委員

ありがとうございます。大変参考になりました。

#### □安島座長

ありがとうございます。

それでは、最後に峰委員からお願いいたします。

#### □峰委員

皆さん、こんにちは。全国地域づくり推進協議会の会長をしております峰でございます。

今この会もだんだん小さくなってきて、現在36自治体しかない状況でございます。その中で今、会長を仰せつ



かっておりますが、今日も本当に素敵だと思いますか、各自治体が知恵等を出されて、しっかりと、地域でしかできない、そういったイベント等々

に取り組みされていて、そして、またこのような活動をされていることに対して皆さんに敬意を表するところでございます。

私は佐賀県唐津市というところで市長をしております。福岡空港から1時間ぐらいのところ。佐賀県というのは、南側に女の海といいますか有明海があって、私が住んでいます唐津には男の海と言われる玄界灘があるわけございまして、魚の種類も全然違います。ワラスボとかタイラギとかクチゾコとか、多分皆さんはピンとこないかも知れませんが、そういうものが有明海の方にはあります。もちろん玄界灘の方は、唐津くんちに来られた方がおられたらお分かりかと思いますが、アラとかタイとかがあるわけです。特に青物、アジ、サバ、地上養殖のQサバとかいうのを今やっております。そういった風に、海があって山があって川があるような町でございます。

そのような中で、残っていらっしゃる鹿部町製品開発研究会の皆さんにお尋ねしたいのですが、軽石を使った「ふっくら軽石干し魚」というのがブランド化ということで頑張ってきたという報告をいただきました。唐津には呼子というのがあるのですが、皆さんご存じですかね。要するにイカですね。私達は、小さいころとか東京とかに出てくる前は、イカは透明なものとしか知りませんでした。それが福岡とか大阪、東京に行くと白いイカになるのです。これ違うじゃない、というような流れで、そのように呼子というのは透明なイカを食べられるところでございます。ぜひおいでいただければと思うのですが、そのイカが今だんだん揚がらなくなってまいりました。やはり温暖化の問題とか、気温が1℃上がると

魚は3℃ぐらい上がるということで、大変存在が厳しい状況もありまして、多分お隣の国あたりが最近大和堆あたりで大変乱獲されておりまして、ああいった影響もあるのかな等、色々考えているところでございますが、先ほどこの研究会の方のご挨拶の中にあつたのが、補助金に頼らないで頑張っておりますと。行政を預かる者としては大変うれしいお言葉でございましたが、だんだん資源的に海産物の資源というのがどうなのでしょうかとというようなところをまず1点お尋ねしたいのと、軽石をどのような形でお使いになられて「ふっくら軽石干し魚」ができていのかというのが大変興味があります。はっきり言いますと、イカが獲れません。どうやるかといったら、CAS (Cells Alive System) ですね。CASで急速冷凍をやって、それを冷凍庫にためておく。獲れない時はそれを解凍して、今技術が上がっていますので、かなり生でもおいしく食べられるような状況になりました。そういったことでやるしかないのに、どのような形で海産物というような状況を、まず1点お尋ねしたいのと、軽石を使った干し魚の売り込みですね。

それともう1点、よくイカを灯台下暗しで、こういった製品はあまり食べないのですよね。常に外にブランドして送るではないですか。でも、本当は自分達も食して、それが全国に行った時にお土産に持っていくというようなことが一番地域としては良いんじゃないかと思うています。ですから、地域を誇りとして全国にPRをするためにも、そのようなことというのは、どのような形で活動されているかなというのがちょっと興味ありまして、お尋ねしたいと思っております。

#### □高橋氏

わかりました。今、市長さんからお話があつたように、もう全部わかっているとか、まず魚をとって市場で競り落としますよね。競り落としたら、まず冷凍してしまいます。これは先ほど言ったとお

りです。競りで落としたものを冷凍して、それからその都度必要なものを取り出して、それで今言った軽石干しにするということなのですが、種類のいきますと、まずホッケだとかソウハチ、ソウハチというのはカレイです。それからイワシ。大体今はこの3種類を中心に軽石干しをやっているのですが、軽石干しというのは、一番の特徴というのは水分を吸うことですね。今言った、獲って冷凍した魚を次の日に解凍しておいて、それを加工して開いて干すわけです。それに軽く塩を振るのですが、この塩と低温で乾燥させるわけですね。これが製造過程では一番苦労したことかなという気がします。

それから、今、市長さんが言われるように、工程的にはそういうことです。塩を振って、大体、そのものの大きさにもよりますので何とも言えないですが、3%~8%の間で塩を振って、そこから塩分をとってもらおうということになります。軽石にとってもらおうという形なわけです。そこで一番大事なのは、においがなくなるということ。僕が一番驚いたのは、子供がこの魚なら食べられるという、これがちょっと驚きましたね。これならいけるのではないかと僕は思いました。

やっぱり子供が食べられるというのは何が一番あれかということ、先ほど言ったように、においがちょっと。朝獲ったものをそのまま食べるのだったらそうでもない。魚はちょっと魚のにおいが。魚種が、まず唐津とはだいぶ食種が違いますので、何とも言えませんが、漁師町でもにおいがするのですよね。やっぱりこれを子供が嫌がるのですよね。だから、どうしても肉に走っていくという。これは傾向的にどこにもあることだと思うのですが、これを改善するにはどうしたら良いかということ、食べやすくしてあげるということ。これには、今言ったように、においだとかそういうもの、それから、ふっくらまろやかにしてあげる。これは食べてみれば、今、ふるさと納税の返礼品なんかはかなり出ていますが、ぜひまた今年もふるさと納

税の返礼品に軽石干しをお願いしたいということがかなり来るんですよ。ということは、1回食べればおいしいと。焼き魚にすればおいしいよということなのですよ。これがちょっとおもしろい、これからもっともっと広げていくところかなと思っています。

ただ、1点、これからその軽石干しをどうやって広めていくかという、魚種を広げるとか、こんなことはできますね。ところが、これをもうちょっと別の工夫をして軽石干しにしたいということです。もちろんご飯にまぜて食べるとか、色々なことは考えてやっているのですが、もうちょっとこれをレシピ的に変えていければ良いかなというのと、魚からもう少し例えば肉だとか他のものにも変えていけないのかなと考えております。ということは、最初に言った、水分を吸うということと、においがなくなる、この2点でもう少しこの軽石干しを続けていってみようかなと、今思っているところなのです。ちょっと答えになっていないかもしれませんが。ごめんなさい。

#### □峰委員

ぜひ、私、ふるさと納税をさせていただきます。ありがとうございました。

#### □安島座長



どうもありがとうございました。

1ラウンド終わったところでもう時間になってしまいました、さらなる議論が時間的にできないので

すが、何かありますか。

それでは、ちょっと残念ですが、ここでまとめをさせていただいて終わりにしたいと思います。

今日表彰された事例というのは大変多様で、色々な分野で皆さんご苦労されて成功されています。また、それについて委員の方より、ご専門の立場から色々質問

をいただいて、色々わかってきたことがあるのかと思います。十分にはまとめられません、今後の地域づくりにも活かしていける視点が、いくつかあったと思います。

1つは、かなり多くの事例に通じることは、ちょっと厄介なものを逆転の発想で逆手にとって利用して価値を生み出したのかなと思います。トマトの例とか、あるいは軽石もそうですし、空き家とかもそうだし、雪もそうですね。本来どう処理したら良いか困ったものが、使い方とか発想を変えることによって、これまでにない使い方、つまり新たな価値の創造につながっているというところが、かなり共通しているところかなと思いました。

2点目は、メンバーが多彩な方ですね。同じ会社だとみんな同じことをやっているというケースがあると思いますが、地域の方なので、色々な専門の方が集まっているので、先ほど大工さんがいて、設計士の方がいてデザイナーの方がいてとか、色々な職業の方が集まることによって、これまでにない新たな発想が出てくる。そして、色々な方が参加できる、今の言葉で言うとプラットフォームができていっているのかなと思います。このような、みんなが参加できるプラットフォームができると、さらに色々な活動が広がっていくのです。最初は1つのことだったのですが、色々やっていくうちに徐々に活動が広がっていく。また、これから次は何をしようかなんていう話もあったかなと思います。そういう活動が広がっていく。そしてまたそれが次の新たな収益事業に結びついていくというような展開になるのかと思います。

お聞きしておりますと、あまり補助金に頼ったところがなく、基本的には皆さんの自主的な活動があって、補助金は控え目に支えているというようにお聞きしまして、補助金の出し方にも工夫が必要なのかと思いました。あとは、やはりリーダー的な格の人がどこにもいらっしゃって、活動していくうちにリーダー的な人

がますますリーダーらしくなっていくのか、あるいはそういう方がいたからうまく活動ができたのか、ちょっとわからない部分もありますが、そういうリーダーの存在というのも非常に大事だったのかと思っております。

もう少し時間があるとさらに議論ができたかと思うのですが、この活動の場づくりですとか、今ある資源をもう一度ちょっと見直してみるとか、そのようなことが新しい展開になるのではないかなということをまとめにさせていただいて、今日のこのパネルディスカッションを終了したいと思います。

どうもありがとうございました。